

Scallops Fishing This in Operation

外海ホタテ漁 本操業中

豪快なエンジン音とともに早朝から
さろ丸がしびきをあげる

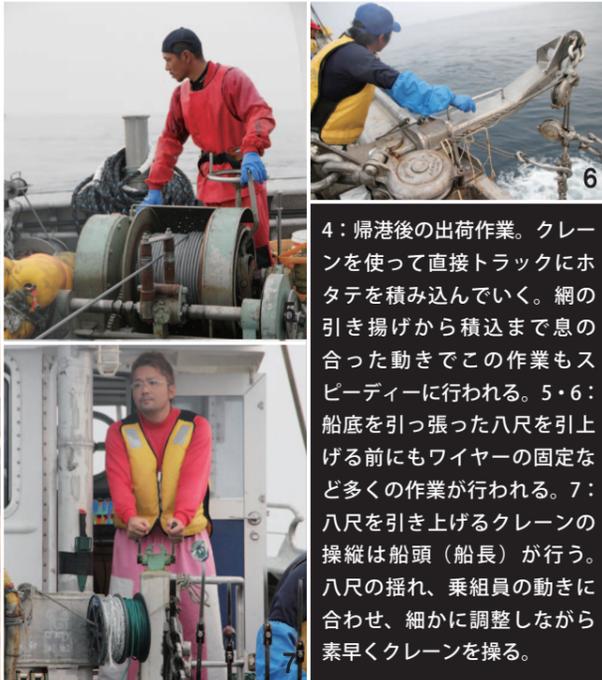
3艘の外海ホタテ操業船、第十八・二十八・三十八
さろ丸が日の出前から動きだす

午前2時40分。富士港に着くと、すでに操業船のエンジン音が聞こえ、作業灯に照らされた船内では操業の準備が行われていました。午前3時、エンジン音が大きくなると、船はその大きな体を動かし始め、目的の海区へと走り出しました。

今回、取材にお邪魔させていただいたのは、第三十八さろ丸。佐呂間漁業協同組合の3艘ある外海ホタテ操業船の中でも一番新しい操業船です。左上の写真の八尺（はっしゃく）といわれる爪のついた網を投げ入れ、海底をひっぱり、砂に隠れているホタテを掻き出してホタテを採ります。八尺は船の両サイドに設置され、大きな外見からも想像できるとおり、かなりの重量があります。その八尺は左下の写真のように、体を使って勢いよく投げ入れることを何度も、25トンのホタテが採れるまで繰り返されます。八尺の中にはホタテ以外の水産物も入ってきますが、それらの水産物や割れているホタテ、死んでしまったホタテを素早く見分け、手作業で選別し、出荷されるホタテを船倉に入れていきます。八尺の投げ入れ、選別の作業は操業中、休むことなく続けられます。乗組員の方たちは無駄な動きをすることなく、全ての作業が安全かつ素早く行われています。過酷な作業ですが、サロマのホタテを採るために働く方たちの動きには、目を奪われるほど、人間の力を感じる魅力がありました。



写真1：船倉に投げ込まれるホタテ。船倉は大人が立てるほどの高さがあり、ほぼ船の幅と同じ幅、長さも10m以上。ここに、25トンものホタテが積み込まれる。2：選別は全て手作業。出荷できるホタテだけを大きさ、色、持った感触など多くのことから見極める。それを瞬時にし、目にもとまらない早さでホタテは船倉に次々に投げ込まれていく。選別中、手は止まることなくホタテを掴んでいた。3：八尺の引き揚げ作業。船に付いているクレーンで引き上げる。効率よくホタテを取り出すなど素早く作業をおこなうために、手作業で一度八尺を整える。安全のため、クレーン作動時にはヘルメットを必ず着用している。



4：帰港後の出荷作業。クレーンを使って直接トラックにホタテを積み込んでいく。網の引き揚げから積み込め息の合った動きでこの作業もスピーディーに行われる。5・6：船底を引っ張った八尺を引上げる前にもワイヤーの固定など多くの作業が行われる。7：八尺を引き上げるクレーンの操縦は船頭（船長）が行う。八尺の揺れ、乗組員の動きに合わせ、細かに調整しながら素早くクレーンを操る。



最後の引き揚げ後の操業船上。左右のホタテは選別前。選別後で25トン以上となる。取材時、初めての休憩は帰港しながらの選別となるこの引上げ後の1回のみ。船上では常に作業が行われる。



操業中、八尺の中にはホタテを捕食する天敵のヒトデも入ってくる。選別作業でヒトデは海に戻さず、カゴに入れて持ち帰り、重さを計り駆除重量が記録される。



写真の右は放流時のホタテ稚貝。左が出荷される時期のホタテ。写真のホタテは養殖もとの比較だが、外海ホタテも4年後に採られるときは、写真のような成長をとげる。



操業船はカゴを船上いっぱい積み込んだ後、外海に出航。4海区を1年おきに変えながら放流し、4年後に採る4輪探で行う。放流作業も20～25キロのカゴを持ち上げる重労働。



5月、組合員の方たちが採苗し、稚貝まで育てたホタテを取込む。サブトンと呼ばれる資材から船上で取り出された稚貝はカゴに入れ、帰港後、操業船に積込まれる。

外海ホタテ。
それは、多くの人の
繋がり。結晶。

未だ数ミリのホタテを採取し、稚貝まで育てる漁師。それを外海に放流し、4年後に採る操業船の乗組員。その他にも、調査など漁組職員、養殖組合など多くの方たちの努力で生産されるサロマの外海ホタテ。美味しいサロマのホタテには、繋がり、という理由がある。